

関西学院の歴史編纂を未来につなげる

～ 図録『関西学院の 100 年』から『関西学院事典』まで ～

川崎 啓一



全国大学史資料協議会全国研究会で、「関西学院百年史編纂と資料編」について報告する筆者。1997年10月14日、東北大学。

1. 『関西学院事典』とは？

関西学院創立 125 周年を迎えた 2014 年 9 月 28 日、『関西学院事典』増補改訂版が刊行されました。関西学院に関する重要事項やできごと、人物、建物などを五十音順に解説する「関西学院ミニ・エンサイクロペディア」といったもので、A5 版 626 頁に 557 項目の記事が掲載されています。2001 年に刊行された『関西学院事典』を増補改訂したものです。

2001 年 9 月 28 日に発行された『関西学院事典』は、学院の創立 111 周年記念事業のひとつとして編纂され、全国の大学でもこれまでに例のないものでした。その約 10 年前、『関西学院百年史』(資料編 2 巻、通史編 2 巻、通史編索引)の編纂が始まった直後の 1990 年 11 月に、『百年史』をどのように考え、どのように編纂していくかを、数人の編集委員によって意見の交換がなされ、そのなかで山本栄一経済学部教授から「『関学事典』というようなものを作れば…」といった発言がありました。意見交換の様子は座談会「関西学院百年史を考える」として『関西学院史紀要』創刊号(1991)に掲載しています。いわば思いつきのその場での発想だったかもしれませんが、山本先生はそれを温められていたのでしょう、『百年史』全 4 巻の完結が近づいた 1998 年頃に、機を見計らったかのように「『事典』作ろう」と声を上げられました。『百年史』編纂直後の勢いのなかですすめられたので実現したという側面がありました。

2. 年史編纂とは？

少しさかのぼって関西学院のこれまでの年史編纂について眺めてみます。ご存知のように関西学院では、これまでに『開校四十年記念 関西学院史』(1929)、『関西学院五十年史』(1940)、『関西学院六十年史』(1949)、『関西学院七十年史』(1959)が刊行されています。その後空白が続いています。90 周年を迎える頃、年史編纂が視野に入れられていたようですが、このときは正史編纂には至っていません。

私が学院に奉職したのは 1984 年です。創立 95 周年の年にあたります。企画部に配属になりました。現在の企画室とは違って、1974 年に企画調査室として設置され、1993 年に廃止された部署です。間もなく創立 100 周年を迎えることから、「創立 100 周年記念事業委員会」が 1987 年に設置され、企画部がその事務局を兼ねることとなり、どのような創立 100 周年を目指すのかの検討が始まりました。審議を重ねて策定された記念事業を推進する事務局として、記念式典や記念行事、記念出版など、数少ない企画部員がさまざまな事業を分担することになり、私の担当のひとつに『関西学院の 100 年』という写真で綴る 100 年史の制作がありました。学院にはすでに 100 年史の編纂が課題としてあったのですが、創立 100 周年にあわせて刊行するには時間がないということで、記念事業のひとつとして「目で見える百年史にまとめよう」ということになり、図録の形をとった略史、『関西学院の 100 年』の出版を目指しました。小林信雄神学部教授(学院史資料室長)を委員長とする「創立 100 周年記念事業委員会記念出版専門委員会」が編集にあたり、作業は学院史資料室(現在の学院史編纂室)が担うことになり、私は 100 周年記念事業事務局として関わりました。

編集を担当された委員によって、関西学院の 100 年をどう捉えるかの議論から始まりました。学院の百年を 8 章構成とし、各章にいくつかの時代を象徴するテーマを設定して写真数点と 800 字程度の文章を掲載するパターンを決めました。これが初めて関学 100 年を俯瞰する作業でした。編集後記に「全委員が 8 つの章を分担し、できる限り各種の新旧資料を参照して執筆した後、全体で活発な討論と検討を繰り返して、その改訂は十数回に及んだ。」(小林信雄)とあります。一方で学院史資料室所蔵の古いアルバム、ファイルボックスやダンボールに入っている未整理写真、写真という写真すべてを徹底的に洗い出しました。さらには学内外からも多くの写真提供を受けました。手にした写真点数は不明ですが、その中から選りすぐりの約 600 点が『関西学院の 100 年』に収録されています。写真渉猟をはじめ編集の作業量は膨大なものでしたが、2 年足らずを費やして完成しました。

『七十年史』以来の学院史編纂という課題がようやく達成されたということになりますが、小林信雄委員長は編集後記でこうも語っています。「私たちはこの 1 年半の間に芽生えたチームワークと友情とを誇りにしている」と。正直な想いでしょう。この図録制作による歴史理解とチーム形成があったことが、後の正史『百年史』編纂の基盤となったのは確実だと思います。

3. 『関西学院百年史』の編纂

すべての創立 100 周年記念事業が終了して委員会も事務局も解散しましたが、改めて 1990 年に「関西学院 100 年史編纂委員会」(後に「関西学院百年史編纂事業委員会」と改称)と「関西学院 100 年史編纂実務委員会」(後に「関西学院百年史編集委員会」と改称)が発足し、『百年史』の編纂が始まりました。同時に私はその事務局となる学院史資料室に異動しました。

スタートの 1990 年度はまだ準備段階でした。まさに白紙の状況で、何も決まっていません。「何年かかるか?」「体制は?」「何が必要か?」「何巻にまとめるか?」。学院史についての研究や調査の不足も認識され、そこで『関西学院史紀要』(1991.6 創刊)の発行を決めました。『百年史』編纂の具体化のために、全体像を描く計画書を策定し、ようやく 1992 年 3 月に『百年史』編纂の基本理念が以下のように掲げられました。

- ① 私立学校の歴史という枠の中だけで考えるのではなく、日本近現代史、教育史、教育行政史との関連を重視する。
- ② 建学の精神を明らかにしていくところに編纂の意味があり、学院史としての歴史像を組み立てる。
- ③ キリスト教主義学校としての関西学院の歴史を記録し、関西学院の教育・研究がこれまで果たしてきた役割を再確認するとともに、関西学院の将来に何が必要か、どのような努力がなされなければならないかを明らかにする。

『百年史』は、資料編 2 巻、通史編 2 巻、全 4 巻とすることとされ、この理念に基づいて、資料編 2 巻の編集から始めました。その過程は『関西学院史紀要』第 6 号(2000.4)に「関西学院百年史編纂と資料編」として記しました。関西学院リポジトリにも収載しています(<http://kgur.kwansei.ac.jp/dspace/bitstream/10236/2328/1/20090603-3-31.pdf>)。ご覧ください。

百年の歴史の中で資料編を編むのは初めてでした。他大学でも資料編を刊行されていますが、多くが通史編を刊行した後にまとめられています。関西学院では、『資料編』に収載すべきと思われる資料および通史執筆に際して必要と考えられる資料を選び出す作業を先に行いました。その最大のメリットは、いずれ執筆される委員自身が、それぞれ担当する年代やテーマの資料一点一点に目を通すことができるということです。実際に委員は連日のように資料室の書庫に潜り込んで膨大な量の資料を繰りました。委員の献身的な努力と労力による検証作業がなされたことで『資料編』の刊行につながりましたが、この重労働の過程こそが通史編執筆にあたっての大きな意味があったと思います。

編纂の理念に加えて資料編の基本方針を以下のように設定していました。

- ① 『通史編』の基本資料を示す。
- ② 資料によって歴史像を組み立てていくことにその生命があり、関西学院百年の歩みを考察できるようにする。
- ③ 可能な限り客観的な資料をとりあげ、それを体系化する。

事務局では、その膨大な資料を整理・整備することに追われながら、同時にテーマ別にあるいは時系列に整理して、いつでも活用できる加工資料の作成をすすめました。例えばキャンパスマップを時代順に綴ったり、年次報告だけを時系列にまとめたりしましたが、こういった加工資料は今も活用されています。

しかし、資料編 2 巻に収載した資料は、わずか 419 点です。学院が所蔵する資料のほんの一部でしかありません。さらに資料を明らかにしていく作業を今後も継続していくことが期待されます。

『資料編』の編纂には、百年を概観するために創立前夜から百年間の資料を一気に検証しました。そして 1994 年 3 月に『資料編 I』、1995 年 5 月に『資料編 II』と続けて刊行しました。さらにこれに並行して通史編 2 巻の編集の助走は始めており、事務局では執筆体制や執筆要綱を検討して準備を進めましたので、各委員による執筆は『資料編』刊行の直後 95 年 7 月に開始できました。

先にも述べましたが、実際に資料にあたった 14 人の編集委員が主な執筆者となり、委員それぞれが研究してきた項目別に正史執筆を分担しましたので、すぐに執筆にかかることができました。そして書かれた草稿には多くの委員が次々に目を通して改訂を重ねました。この間の



『関西学院百年史』通史編 I 刊行後、ゲラ刷りの山を前に記念撮影
1997 年 7 月、学院史資料室(日本人住宅 2 階)

事務局の作業は過酷といってもいいかもしれません。膨大な量の草稿の精査、一行一行徹底的に原資料による裏付け確認が事務局の役割です。一次資料にさかのぼり、史実の再確認、引用部分のチェック、典拠の確認などを厳密に行い、原稿の完成度と高めることとしました。

このようにして97年5月に『通史編Ⅰ』、98年3月に『通史編Ⅱ』が刊行されました。2巻合わせて約1400頁。執筆開始から2年8か月、膨大な量、急ピッチの作業であったといえます。

『七十年史』までの既刊の年史はいわば個人が書き上げたものでしたが、編集委員会委員長の柚木学は、『百年史』全4巻の完結を「関係者それぞれの学院に対する熱き想いと清冽な期待の結晶であると確信いたします。」と編集後記(『関西学院百年史通史編Ⅱ』1998.3.20、736頁)に記されています。

そして続けて「学校史は広義の精神史を意味します。新しい世紀に向けて重大な使命に生き続ける関西学院のこれからの歩みに本書が一つの道標としても役立つものとなることを祈念するものです。今春、学院史資料室は時計台に移転しました。百年史編纂の過程で収集された膨大な、しかも貴重な資料の整理・保存だけでなく、関西学院存立の意義を継続的に検証し、学院史に関するあらゆる情報の発信基地となるとともに、やがてまた次々と続巻が企てられる学院史の創出母体として学院史資料室がいっそう充実・整備されることを願ってやみません」と締めくくられています。

4. 『関西学院百年史』完成後の動き ～『関西学院事典』の編纂～

学院史資料室の事務室は、『百年史』完結と同時に旧日本人住宅から現在の時計台に移転しました。新たな資料室のスタートとなり、『百年史』編纂中は休刊していた『資料室便り』(現在の『学院史編纂室便り』)を復刊し、「関西学院歴史サロン」という楽しい講演会を開催(1999.5～2009.10、全22回)し、2000年4月に学院史編纂室に改組・改称されました。そして次々と新企画を打ち出しています。休刊していた『関西学院史紀要』を復刊(2000.4)し、「歴史サロン」とは別に「関西学院史研究月例会」(現在の「学院史研究会」に継続)を精力的に開催し(2002.4～)、研究員制度を立ち上げています。いわば山本栄一新室長【写真は第2回関西学院歴史サロン、1999.12.8】の想いを見える化する改革の開始です。『関西学院事典』の刊行もこの流れのひとつといえるでしょう。

『事典』編纂の提案は、『通史編Ⅱ』編纂の終わる頃でしたが、その時は予算化されませんでした。『百年史』全4巻が完結してしばらく後に、学院では新たに創立111周年を記念する事業が計画されました。その記念事業のひとつとしての『事典』刊行の提案が採択されました。『百年史』の延長の形で、「大学の事典」というのが企てられたわけですが、日本の大学では初の試みです。私の知る限りでは、『関西学院事典』刊行の翌年に『日本女子大学学園事典』が出されており、続いて2008年に『慶應義塾史事典』、2014年の『福岡大学75年の歩み 事典編』が刊行されているだけです。『関西学院事典』が動き始めた時、すでに私は広報室に異動していました。しかし、凶録から始まり『百年史』編纂の推進を担当したことからの指名で、当然断ることはできません。こんどは広報室に所属しながら編集委員として参加することになりました。山本栄一経済学部教授(学院史資料室長)を委員長とする7人の編集委員により推進しましたが、当然ながら執筆するのは『百年史』の執筆者が中心となりました。かなりのエネルギーが必要とされる事業であったことは事実で、いわゆる歴史だけではなく、学院の今を記すものとしたので、学生を含め全学の協力があって刊行されました。経緯は『関西学院事典』の編集後記に詳しく「山本節」タッチで書かれていますので、ここでは省略したいと思います。

山本委員長は『事典』編纂については密かに勝算を確信されていましたが、「もし計画どおりに百年史が編纂できれば、正直、事典までの距離はすぐではないが、問題はやるかやらないかという心意気だけではないかとも考えていた」と編集後記にあります。

5. 『関西学院事典』増補改訂版の編纂と未来への期待

『事典』刊行によって一連の年史編纂が終了しました。

私は5年10カ月の広報室を経て、校友課に3年2カ月、広報室に戻って3年10カ月。その間には折り鶴事件やワングル遭難事故がありました。

といったところで、こんどは創立125周年記念事業で『関西学院事典』の改訂版編纂が浮上してきました。先の『事典』刊行から10年以上経っています。『事典』の内容は当然古くなっています。学院も大きく変化しています。そこで私は再び学院史編纂室に戻りました。

増補改訂の編纂については、前回のノウハウを用いながらすすめればいいのですが、事務局は2人だけ。大量の編集作業をするには困難であることがはじめから想定されましたので、原稿作成とその精査の方法・体制を

考えました。そこで行き着いたのは PC を使った執筆システムの構築です。編集には必ず校正作業が伴いますが、2校、3校と重ねていくときに膨大なゲラ刷りが発生します。そのゲラを委員の数だけコピーをし、それを各委員に送り、朱の入ったゲラが返送されたら事務局では別のゲラに朱を一元化して印刷会社に戻す。普通の編集作業ではこの作業を繰り返しますが、その手間と時間を節約するために、『増補改訂版』では、編集と印刷の協力会社の株式会社コミニケと東洋紙業株式会社と共同して原稿執筆システムの開発をしました。

具体的には、全委員に ID・パスワードを渡します。システムにアクセスすると、トップ画面に自分の担当する全項目が表示されますので、執筆しようとする項目を選択して原稿記入用のシートを出します。新規項目以外は前回の事典の原稿をどう改訂するかから始めますので、このシートにはあらかじめ前回の原稿データが入力されています。これを改訂しながら原稿を完成させていくわけですが、このシートにコメント欄があって、どこをどのように修正したかなどのメモを記入します。全委員が全項目のシートにアクセスできるシステムなので、改訂された原稿を読んだほかの委員は誤りを指摘したり感想を述べたり、同様にコメント欄に記入します。本文は執筆者と事務局だけが修正できますが、ほかの委員はコメント欄に記入するだけです。執筆者はこのコメントを見て本文を修正します。そのことをまたコメント欄に記入しておきます。このようにペーパーレスで校正を重ねていくシステムです。印刷会社のサーバにこのシステムをおいていますので、印刷会社も原稿執筆の進捗がリアルタイムで把握できます。そしてそのデータをそのまま印刷データとして流していきますので、画期的で有効なシステムとなりました。このシステムを活用したのが今回の増補改訂作業の特徴のひとつでした。

前回の『関西学院事典』から 13 年の間に法人合併や学部新設、組織の改編など、大きく変化していますので約 200 頁増、約 50 項目増、約 1.4 倍にボリュームが増えた『増補改訂版』が完成しました【右は完成した同書を手にする筆者、2015.5.22】。



そして、さらにもうひと工夫を加えました。

『事典』のすべてのコンテンツ 557 項目を『関西学院事典』Web 版として関西学院公式ウェブサイトに掲載しました。これが私の最後の仕事となりました。紙ベースの書籍として販売しており(¥3,024 税込、取扱:関西学院大学出版会)、ウェブサイトに掲載すると世界中の誰もがタダで読むことができるので少し矛盾するところがあるかもしれませんが、そもそも多くの方に活用されることが目的です。そして Web 版にはもう一つ大きなメリットがあります。常に更新できるということです。事典の項目は時とともにその内容は変化します。今回の増補改訂も 13 年を経ての刊行でしたので、ほとんどの項目に朱が入りました。歴史的事項でも新たな発見があったりします。誤植を含めてですが、そうした時に紙ベースだと正誤表を作るか、次の改訂版を発行するかしか方法はありませんが、Web 上では、いつでも改訂が可能です。時とともに関学は変化していきます。それに応じてこのウェブサイト上の『関学事典』の内容は、今後も更新していただきたいと思います。

先に述べましたように『百年史』が完結した時点で、学院史資料室は新たなスタートを切りました。当時の山本室長は『資料室便り』を復刊して、学院へのお願という形で声明をだされています。『増補改訂版』が終了した現在と共通するものがあると思います。一部を引用してみます。

「今後も新しい時代に学院の在り方を問い、その指針を立てて行くためにも、過去の学院の歩みを省みてその蓄積に学びつつ時代を切り開くためにも、また学院を広く世に知って貰うためにも、更に同窓たちの思いを新たにするためにも、眠れる資料を活用する人材を産み続ける事業が必要とされます。…眠っている学院史資料の利用・活用を計って行くことは、最低限求められることです。それは、今後の学院史発刊の土台作りとしても、また今日、大学史やキリスト教主義学校史の学問的取り組みが進んでいる各大学・学校の姿勢をも考慮するとき必要なことであると思われます」(『資料室便り』No. 8、1998.12.10)。

学院史の研究が継続され、資料の整理と検証が積み重ねられることによって、はじめて近い将来訪れる『百五十年史』編纂に対応できるものでしょう。

「過去に目を閉ざすものは未来にも盲目である。」(リヒャルト・フォン・ワイツゼッカードイツ大統領、1985.5)といった言葉があります。まさにこれまでの関学の歴史を見ますと、関学にはいろんな場面で、すばらしい見識が見受けられます。もう一度『関西学院百年史』や『関西学院事典』により関西学院の歴史に触れ、現在を捉えるとともに未来をしっかりと見据えることを期待したいと思います。

【2015年3月まで関西学院職員、全国大学史資料協議会西日本部会名誉会員】

『関西学院事典』(増補改訂版)は Web 公開されています。関西学院のトップページ「関学について」、または学院史編纂室のトップページからご利用ください。事典の内容を 50 音、カテゴリ、キーワードから検索することができます。